

近現代の青森県津軽地方における刀剣の伝説と世間話

小山隆秀¹⁾

Studies on legends and folktales of swords in modern Tsugaru-region in Aomori

Takahide OYAMA

(キーワード：刀剣、日本刀、伝説、世間話、刀匠、研ぎ師、シャーマン)

1 はじめに

日本の刀剣類は、古代から神事や儀礼、軍事などの様々な場において、多様な機能と役割を果たし、近世以降はそれを帯びることが武士の身分表象にもなった歴史的な器である。一方で、片刃造の湾刀という特徴的な構造を持つ「日本刀」の起源については、未だ明らかではない。考古学や歴史学の成果によると、日本刀は、古代の北海道および東北地方北部を重要地域として、平安末期には、日本刀の基本的構造である「湾刀であること」「鑄造であること」「刀身に鑷^{はばき}が摺り合う形で柄木に装着され、鑷の着脱が自在に行える構造であること」という、三つの要素が完成されていたという²⁾。そして、中近世には武具や美術工芸品として用いられた³⁾。

また日本刀は、独自の精神観や思想が派生した器でもあった。それによれば日本の刀剣類は、古代中国から古代の日本列島へ伝来した際に、中国における剣の観念が、日本独自の「天上と地上を結ぶ存在」へと転換された。さらに反りを帯びた片刃造という基本的形態が完成した平安期に、日本刀は武家と結びついた。そして中世には修験の辟邪の呪術と結びつき、近世には心性や呪文に関わる象徴的存在となった。そして、そのような古代からの神仏を象徴する刀剣観、歴史的な人々の共通理解としての皇位や武を象徴する刀剣観、個々の現実の活動における心性を象徴する刀剣観などの様々な観念が、近世武士の剣術伝書類へ収斂していったという⁴⁾。

だが、明治維新によって、刀剣文化の主たる担い手だった武士層が解体された。さらに明治9年(1876)の廢刀令では刀剣類の携行が禁止され、日本刀は実用の場を失った。第二次世界大戦中は、再び刀剣類が、兵士の精神的なシンボルとして、または近代の白兵戦における実用の武器として再注目されたこともあった⁵⁾。だが戦後には、GHQにより国内の多くの刀剣類が没収され、一部はのちに「赤羽刀」として返却されたものもあるが、廃棄されたり、散逸したものも少なくなかったという。

昭和33年(1958)年には、いわゆる「銃刀法」と呼ばれる「銃砲刀剣類所持等取締法」(のちに「銃砲刀剣類所持等取締法」へ改正)が施行され、許可された刀剣類以外は、原則的に所持が禁止され、取り扱いについて違反した場合は罰則が加えられるようになった。以上のことから、近代以降の日本刀は、民衆にとっては身近な存在ではなくなり「貴重な歴史資料」「高価な美術工芸品」等として、または「恐ろしい凶器」として忌避する者もあるなど、日常とは乖離した特別な存在として認識されてきたといえよう。

そのようななか、近年は日本刀についての新しいイメージや、従来には見受けられなかったような文化資源としての活用方法も生まれている。例えば、国内外の若者を中心としたゲームやマンガ、アニメなどの異分野と結びついて、再注目された。それを受けて日本各地の博物館でも、鑑定眼のある中高年層向けに貴重な刀剣を紹介するような従来の展示とは異なった、新しい趣向の企画展や特別展が開催されている⁶⁾。これについて、古代から中近世の日本刀については膨大な研究史が蓄積されているものの、近代以降、どのような社会的役割をし、一般社会でいかに新しい価値観が付与され、認識されてきたかについての分析は、これからであるといえよう。

また近世武士の身分表象の道具であったとされる日本刀であるが、近世後期になると必ずしも武士固有の道具ではなく、その操法である武芸とともに、一部の村落や都市にも伝播しはじめていた状況もわかってきている⁷⁾。実際に、町部や村落で継承されてきた前近代の民俗芸能のなかには、日本刀を採り物として舞い、「剣舞」や「三本剣」「五本剣」などと、刀剣の名を演目名に取り込んでいる芸能も少なくない⁸⁾。すなわち日本刀は、近代以前から、武士層のみならず、民衆の暮らしの周辺にも存在してきた器だったといえよう。つまり近年、首都圏の各博物館では、国宝の刀剣類の展示が人気を呼び、多くの老若男女が参集しているが、その多くは、特権的な力を持った諸大名や豪族に関わって製作された希少な刀剣類が多く、日本列島各地の歴史で刀剣が果たしてきた機能と役割の多様性からみれば、その一面にすぎないのではないかと。すなわち公家、大名のみならず、個々の武士や民間宗教者、村落の郷土等、それぞれの地域の階層と生活様式のなか、それぞれの刀剣の有り様と機能が違ったのではないかと。

一方で民衆の生活習俗を研究対象としてきた民俗学では、日本刀に言及する機会はそれほど多くはなく、その視点は同じ鉄製品でも、農具や農鍛冶の調査研究の方が一般的である⁹⁾。おそらく研究者のなかにも「日本刀は武士の特権的な道具であった」という認識が強く、民衆とは無縁の存在である、という観念が強かったためではないかと。しかしその一方で、民俗学の石塚尊俊は、中国山地の採鉄冶金や鍛鉄とその民俗をまとめるなか、島根県仁多郡三成町大字三所に住む代々の野鍛冶が、近代以降に独学で鍛刀技術を習得し、第二次世界大戦期の需用等で、全国的に有名な刀匠家となった事例を昭和40年代に調査し、報告している¹⁰⁾。

このように近代以降の日本刀の社会的機能や、人々の暮らしとの関わりに関する調査研究は少ない。しかし現実のフィールドを歩けばいまなお、日本刀に関わる多様な伝説や伝承、世間話が採集できるのである。すなわち本報告は、近現代における青森県津軽地方の生

1) 青森県立郷土館主任学芸主査(〒030-0802 青森県青森市本町二丁目8の14)

活の諸相のなか、日本刀に関わる言説に注目して採集し、民衆の暮らしの中に息づく日本刀の多面的な姿について考究していくための試論である。

2 刀にまつわる伝説と伝承

(事例 1) 有名な弘前市十腰内巖鬼山神社の刀鍛冶伝説に出てくる鬼神太夫¹⁾は、刀を鍛えるとき、口から火を吐き、人間のように鋤を使わずに、片手で刀を自らの口にくわえて、何度も歯で噛むようにして、刀を打っていたと伝えられている。(五所川原市、男性)

(事例 2) 津軽には、戦国末期の武将、石田三成の刀が伝わっているという。関ヶ原の戦いで敗れた石田家は、京都から津軽地方へ落ち延びてきて、A家と、木造に土着したB家の二つの家筋に分かれたとされている。そして弘前市茂森町の曹洞宗寺院、C寺にある稲荷様は、かつては三成の首であったという伝説がある。それは、石田家の娘が津軽家へ嫁入りしていた縁で、弘前藩祖となる津軽為信が、斬首されて塩漬けになった三成の首を桶に入れて「鍛冶稲荷様だ」と言って津軽へ持ってきたものなのだという。

そのときの一行に、三成の一族を紛れ込ませて津軽へ連れてきたという。そのとき、石田家は身分を隠すため、脇差で一族の女性や愛妾、子ども達を殺してしまった。その刀が「三成の脇差」であり、いまから30年ほど前まで木造のB家に伝わっていたという噂だ。

その分家のご主人は刀剣が好きで、旧弘前藩お抱えの刀鍛冶であった弘前市のD家とも交流があった。そのため本家から「三成の脇差」をもらっていたが、あるとき家が火事になってしまった。火事に遭った刀剣類は「焼き」が落ちてしまい、ナマガネに変化してしまって刀剣としての価値が失われてしまうものだ。この火事で、この家のたいいの刀剣類もダメになってしまったが、不思議と「三成の脇差」だけは焼きが残ったという。また不思議なことにその火事の前後に、本家のジサマが、刀が我が家に戻ってくる夢を見たものという。(五所川原市、男性)

(事例 3) 五所川原市飯詰集落には、E家という旧家があり、弘前藩主津軽家につながる「津軽牡丹」の紋様が付いた一振りの脇差を伝えてきたという。戦国末期のこの集落には、地元の豪族が守る高館城があったが、津軽を統一した津軽為信によって滅ぼされた。敗れた高館城主は、現在の集落内にある大日堂のあたりで切腹したのだという。

その後は、もしもこの集落で民衆による一揆の企てがあれば、集落に潜伏している間者E家が察知して、内側から一揆勢を攪乱し、津軽家へ情報を流す役割をするのだという。

例えばE家が、ムラによる一揆の企てを察知した場合、同家の者が、津軽牡丹が付いた脇差を持って、近隣の「湊(みなと)」という土地から岩木川と平川の舟運に乗り、馬に乗り換えて弘前城へ駆けつける。入城する際に、津軽牡丹の脇差を掲げて「開門」と叫べば、すぐに追手門が開かれて、下馬することなく城内へ直行できたという。藩へ情報を提供した後は、何事もなかったようにムラへ戻り、一揆の仲間同士が仲違いするような攪乱工作をしたという。

これが俗にいう「津軽の足引つ張り」の始まりであるという。つまり為信は、津軽各地での反乱や一揆を防ぐために、あらかじめ仲間同士で違いを牽制しあい、足を引っ張りあうような人情を作ってしまったという。よって昔ほどのムラでも、そのような密偵の役割をする家がE家であったという。(五所川原市、男性)

(事例 4) 西北五津軽地方の各旧家には、日本各地で作られた名刀が所蔵されていることが多い。その理由は、幕末維新期の戊辰戦争で、諸藩の藩兵達が蝦夷地に渡る途中、津軽の各民家に泊まったのだが、そのときに宿代の代わりに刀を置いていったからだという。よって津軽平野の各旧家には、日本各地の様々な刀がたくさん残っているはずだという。だがいくら名刀であろうとも、最近は跡継ぎが刀に関心がないために、よそへ売却したり、警察へ頼んで廃棄処分してしまう家も少なくなく、貴重な文化財が失われることは甚だ残念だと思っている(五所川原市、30代、男性、弘前市、70代、男性)。

3 刀にまつわる世間話

(事例 1) 先祖から旧藩以来の剣術師範家だったため、多数の刀剣類が伝わっていた。しかし明治維新で役職を解かれた後、先祖が東京見物の旅費代わりに東京へ持って行って質屋に出した。すると「正宗」のような名刀だったはずなのだが、質屋には「いい刀ではない」と安く買い叩かれてしまったようだ。また第二次世界大戦後には、GHQ が各旧家をまわって、所有する刀剣類を押収してまわった。当家でも数振り取られたが、いい刀剣類を選んで天井や床下へ隠したものだという。のちのそれらを刀剣の登録審査会へ持って行って登録した。(弘前市、明治37年生まれ、男性(故人))

(事例 2) 明治から昭和初期にかけての弘前のねぶたには、剣術や撃剣、剣道を稽古している町道場の血気盛んな若者達が参加して、互いの対抗心と腕試しのために喧嘩や乱闘をしていた。木刀や刀剣類や槍、投石、黒い杖の中に細長い刃物を隠した「仕込み杖」を使う者もいたらしい。例えば昔、笹森町にあった北辰堂では、ライバルであった陽明館の夜襲を受け、刀や木刀で戦い、学生が頭を割られて翌日亡くなった。翌日、道場前のドブには、斬り合いで落とされた指が落ちていたという。わたしも幼い頃、夜に先輩達に連れられて参加し、黒い小さなネブタを担がされて歩いていると、石を投げられてきて逃げ回ったことがある。しかし現在そのようなことをする者はお

らず、剣道稽古は竹刀が中心となり、刀剣を使って稽古する人は少なく、逆に刀剣は道場の床を傷つけるといって嫌う師範まで出てきた。
(弘前市、明治37年生まれ、男性(故人))

(事例3) 第二次世界大戦には、自分が剣道を教えた生徒達もたくさん出征していった。戦線において刀で打ち込んだとき、習った剣道式でまっすぐ打っていくと、その勢いで誤って自分の膝を斬ってしまう者が多かった。よって両足を前後左右に踏み開き、腰を落として打て、と教えてやった。また騎兵をやった教え子は、剣道のように打ち込んでなかなか効果がなく、突きの方が確実だったと語っていた。(弘前市、明治37年生まれ、男性(故人))

(事例4) 武道の稽古では「竹刀であろうとも、真剣のように刃筋を立てて使え」と指導するが、なかなかそうはいかない。第二次世界大戦前、天覧試合に出場した有名な剣道師範が、真剣で巻き藁(または巻いた畳表を一晩水に漬けたもの)の試し斬りをしたとき、何度やっても斬ることができず、とうとう刀を曲げてしまい、気に入らなかったのか怒って帰っていったという話がある。(弘前市、男性)

(事例5) 弘前藩お抱えの刀匠だったD家は、もともとは鉄砲鍛冶でもあったという。弘前市石川には弟で分家した、F氏が住んでいて、刀鍛冶とともにゴミソ(民間宗教者)もやっていた。
あるとき、珍しい刀の研ぎについて依頼があった。関もの軍刀で、冴えはないが通常の二尺一、二寸より長めで、二尺三寸あった。見ると箱書きの裏に、一日で十数名を斬った軍刀であると書いていた。よってその祟りであろうか、その家の男子はみな心が病んでしまい通院しても治らないという。あるゴミソにみてもらおうと「お前の家に光り物がある」と指摘されたので、怖くなってその刀をG神社宮司の紹介で大きなH神社へ納めた。すると病が全快したという。研ぎ師は、その刀が昔、実際に人を殺めた刀かどうかすぐにわかるものだという。このように、気味が悪い刀があれば、神社やお寺に奉納する人が昔からいたようだ(五所川原市、30代、男性)

(事例6) D家は弘前藩で、鉄砲鍛冶から刀匠になった家筋である。幕末の先祖は、弘前藩による鋼鉄製甲板を装備した軍艦の建造に協力したが、完成後、一番最初に藩主が乗船すべきところを、誤ってそれより先に足をかけてしまったために、藩主の怒りをかい、処分されたことがあるという。当家の氏神は伏見稲荷であり、屋敷内にも小祠を建てて祀っている。稲荷様については不思議な話がある。

昭和期のD家には兄弟がいた。兄であるI氏は、無鑑査の称号を持っていた。若い頃は、軍の命令で国営の刀鍛冶場である栗原学校(鍛造所)の受講生となって刀鍛冶技術を学んだ。第二次世界大戦前は、軍の鍛造所が靖国神社、伊勢神宮、伏見稲荷、劍神社などにあり、そこで学んだ者が軍の拝命鍛冶になったという。最初は兄が伏見稲荷鍛造所へ行ったが、後に人手が足りないので電報を打って弟も呼び寄せたという。

伏見稲荷に到着した弟は、まず神社拝殿へご挨拶に行った。すると拝殿の大きな百目ロウソクの火が大きく燃え出し、黒煙を出し始めた。それを見た禰宜が「稲荷様が、お前にカタッて(付いて)いきたいのだ。お前に力授けるから稲荷様を信仰せよ」と言ったという。するとそれ以後の弟は、人についた悪いモノを払ったり、体の痛みを直すことができるようになったという。

あるときには、日中に路上で知人と話しているときに、駐車している自動車の影に「何かいる」と言い出し、誰もいないところへむかって「お前が来るところではない」と急にどなり始めた。不審に思った知人が「何かいるのか」と聞くと「いる」と答えた。そのうち「これで大丈夫だ」と落ち着いたという。

またあるときは、刀を作っていて、何度やっても焼き入れがうまくいかない。とうとう怒り出して小便をひっかけてしまった。するとその夜の夢に神様が出てきて「そんなに短気になるな。ちゃんとやればもう少しでよくなるから」とたしなめられた。すると翌日にすぐに焼き入れが成功したという。

またある年の春、兄のIが、お伊勢様に奉納するための刀を打っていたが、なかなかうまくいかない。刀匠や研ぎ師が、神様の刀に手をかけるときは、いつもやっている仕事が進まなくなるものだという。焼き場土を塗るとき、なかなかうまくいかない。そのうち眠くなり、ウトウトとしていると、窓に霊峰岩木山が見えた。その岩木山に薄い雲がかかり、その雲上を女の神様が歩いて行く姿が見えた。ハッと目が覚め、岩木山に薄い雲がかかっているその光景を焼き場に映してみたところ、すぐに成功したという。(弘前市、昭和9年生まれ男性、五所川原市、30代、男性)

(事例7) 研ぎ師J氏にも不思議な体験がある。弘前市石川に住むF氏の弟が打った刀で、塩竈神社へ奉納するための宝剣を研いでいた。刃艶と地艶が大事である。刃取り前の最終の仕上げとして、砥石を紙ほどに薄くして漆を塗り、その上に千代紙を貼り、それを細かく裁断したものを刀の上に載せて指でこすっていく。

もう少しで終わるはずなのに、何度やっても、刀に合わせて砥石を交換しても、刀に「引き傷」が残ってしまう。嫌になって作業をやめてしまった。職人は気が乗ったときに仕事をするもので、気が乗らなければ仕事をしないものだ。

あるとき、近くを流れる岩木川の土手を歩いていると、白い着物を着た女性が歩いてきて「いまに良くなる」と言って通り過ぎていった。後日、雨の日に傘をさして外出し、仕事場へ戻る途中、以前捨ててしまった小さな砥石が偶然目に入った。それを磨き直してやってみると、すべてうまくいったという。

人間よりも、神様の方がわがままなことがあるという。刀を研ぐとき、誰かが背中におぶさっているような重い感じがすることもある。また、神様が来るときは首の周りがヒヤッと冷たくなったり、首元から冷たい手を入れられたような感じがするものだといい、同じことを小泊K神社のカミサマ（民間宗教者）も言うという。

また、わがままな刀があるものだという。不吉な刀が来るとイタズラされたり、モノが無くなる。脇差または短刀を研いでいるときのことだ。なかなか仕上がらず、同じ箇所ですべて手を切ってしまう。普通、研ぎ師はそんな失敗はしないものである。おかしいなと感じ、そういえばその刀は、持ち込まれたときから、蜘蛛の巣のような錆があったことを思い出した。そして「この刀は、人の血をすなぶって（吸って）いるな」とつぶやいた瞬間、家の天井を、あたかも四つ足の動物が走り回るようにガタガタ、ガツガツと家鳴りが始まった。これは同席していた弟子のL氏も目撃しているという。

このような悪いモノとして、ほかにもイヅナを使う人がおり、イヅナがはっけて（走って）歩くことがあるという。五所川原市に住んでいたM氏は、戦国末期に津軽為信に滅ぼされた飯詰集落の豪族、朝比奈三郎左衛門の家老職の末裔だといわれていた。生業は骨董屋で、カミサマのようなこともやっていた。あるときJ氏のところへ遊びに来たが、その着物の懐に何かを隠している様子だった。すると首元からネズミのようなものが出ている。それに気づいたJ氏の父親が「お前はうちにイヅナかけるつもりか」と怒鳴ると、M氏は逃げ帰ったという。

M氏は普段から不思議な呪術を使って、人々の信仰を集めていた。例えば、田んぼに御幣を軽く差して立てておき、神主姿になって婆様達を集めて「神様が来ると御幣が揺れるものだ」といって太鼓を鳴らす。すると、田のなかに棲息しているドジョウたちが音に反応して畦道のなかを暴れるように泳いで逃げていくので、その群れにぶつかった御幣が、泳いでいく方向へ次々に順番に倒れていく。それを見せて「神様が歩いてきたのだ」と説明すると、見ていた人々は驚き信じたという。そしてこの田の水で目を洗うと眼病が治るといってお金を集めていたようだ。（五所川原市、30代、男性）

（事例 8）また第二次世帯大戦後のころ、鶴田町にN家という親子二代の刀匠がいた。親父は刀を打つだけではなく、拵えまで作る器用な人だった。

あるとき裸電球一つの下で、親父が夜中まで刀を研いでいた。その姿は、障子一枚隔てた隣の部屋の息子にも見えていた。よく見ると、その影から青白い炎が、ポツ、ポツと、出ていたという。

このN氏は、刀を造るときに、独特の焼き場土を使って、いい焼きを入れたという。それはおそらく、飯詰集落近くのO高校の土だったのではないかと噂がある。付近は、戦国末期に滅んだ高館城の水源地につながる湿地帯があったといい、ネバツチであって、用水路を作るには最適であるとともに、水源を隠すためにはいい土であったという。高館城はその水源が敵に知られて止められたから落城したのだといわれている。（五所川原市、30代、男性）

（事例 9）小泊P神社宮司の奥様は、もともとは小泊村の大きなコウジヤ（麴屋）で生まれ、嫁にきてからカミサマ（民間宗教者）になったという。お祓いでは刀（模擬刀）を使う。

あるとき、神社社務所が火事となった。この奥様が見ていると、その炎のなか、社の上を大きな龍神がグルグル回っている姿が見えた。そのとたん力を授かってカミサマになったという。それによればその火事は、今までの不浄を清めるための火事だったのだという。

その後は、夢の中で崖を登ったり、竜の背中に乗せられたりして修行させられた。ときおり相談者が来るが、今日何人来るか、あらかじめ夢の中に出てくるものだという。また、いつも相談に来る人の部屋の中に、何か人影が立っているのが見えた。実はそれは、その相談者が、最近、甲冑を買って室内に飾っていたのを黙っていたのだが、何も知らないはずのカミサマはそれを見抜いたのだという。そのことを教えるとカミサマは、人型にはよく悪いモノが宿りやすいから気をつけよ、と指示したという。

このカミサマの夢の中には、何人ものお不動様が出てくることがある。そのなかの白い髭のお不動様が力を授けようとしてくるという。しかし、お不動様では力が足りないから断っている。そのうち、いろんな神様達がやってきたが、最終的には、自分の家が神明様つまり天照大神なので、神明様に決めたという。なおPの神様は、白い着物に矛を持っているお姿であり、きかない（気が強い）が、力がある神様だという。しかしQ神社は、人を神にしているから相性が悪く、近くに行くとか咳が出て止まらなくなるので参拝できないという。

そして小泊には、古代に中国から秦の始皇帝の命令で、徐福がやってきたという伝説があり、現代になってからその石像が建てられている。Pのカミサマは夢で徐福を見たことがある。それによると本物の徐福は若者だったといい、小泊に来たのは彼の家来達だったことが見えたという。また夢の中では、徐福像が下半身と首まで油煙で黒くなっていた。それは徐福一行が、小泊に上陸する前に、一度海に落ちて首まで浸かっているためだという。

真言を唱えて模擬刀を体に当ててその人を清める。そのとき、その人の体を肩から左右左と「左（さ）右（ゆ）左（さ）」と当てて清める。これは水を切るときと同じだという。カミサマでなくとも、よく相談に来るL氏も、風呂に水をためておき、塩を入れて「サ・ユ・サ」の順で五回かぶると清めになるという。L氏は抜刀術の演武前に行くことがある。これについてカミサマは、「私が払うのではなく、神様が払うのだ」という。なぜならば人間の力には限りがあるので、他のゴミソのように自力だけでやろうとすると自ら短命になってしまうものだという。このほかにも刀を使うゴミソが昔、旧森田村にいた。武内宿禰を祭神として、刀を持って人の体に押しつけて悪いモノを払っていたという。

また、昭和天皇が崩御された前後の時代にも不思議な夢を見た。夢のなかの昭和天皇は、風呂敷包みを三つ四つ持って、神様のところに届けると言って去っていかれたという。まもなく昭和天皇は病になられた。治癒祈願のためお祓いするときおり回復されることがあったという。(五所川原市、30代、男性)

3 結びにかえて

近現代の青森県津軽地方における、刀剣に関わる伝説や世間話を報告した。この採集は始まったばかりだが、事前に以下の二点について予想していた。すなわち地域性においては、近世以降、刀剣に関わってきた武家や、日本刀製作に関わる刀匠、研ぎ師、鞘師などが住んでいた旧城下町住民への聞き取りが中心となろうこと。そして武具としての日本刀の話は、第二次世界大戦前後を体験した話者の世代交代とともに聞き取りは困難になっているだろうことである。

しかし実際の調査では、確かに武具としての機能に関する聞き取りは困難であったが、神性を帯びた器または呪具としての刀剣の話は、それを製作する刀匠や研ぎ師といった専門技術者や民間宗教者およびその周辺の人々の間で、古い昔話や伝説を受け継ぎながらも、現在の生活のなかで新しい語りも派生し、再生産されている現状が確認できた。それは都市部だけの現象ではなく、農山村部においても同様である。

一方、同一地域では、これらの地域の歴史を踏まえた伝承のほかにも、主に若年層が主体となって、テレビやインターネット等のマスメディアによって、商業的に加工された日本刀のイメージや情報が多く流布している。両者は互いに影響し、相克しあいながら、現在の一般社会における「日本刀」像が形成されているのではないかと。後者の状況の確認と分析等については今後の課題としたい。このように日本刀は、実用性を失った現代でもなお、変容し続けている歴史資料であるといえよう。

〈注〉

- 2) 佐藤矩康 2006 『北の出土刀を科学する—最新科学と考古学よりみた刀剣文化史への道程』
- 3) 刀剣などの武具をその実用性から再考したものに、近藤好和 2000 『中世的武具の成立と武士』吉川弘文館がある
- 4) 酒井利信 2005 『日本精神史としての刀剣観』第一書房
- 5) 大塚忠義・坂上康博 1988 「戦時下における剣道の変容過程の研究(その2) —試合の規定と技術の変化の分析—」(日本武道学会『武道学研究 21-2』 p161~162)
- 6) 従来の刀剣展とは異なり、アニメやゲーム等と連携した日本刀の展示に、日本各地を巡回した特別展「エヴァンゲリオンと日本刀展」(全日本刀匠会事業部・角川書店編 2012 『同 展』角川書店)、岡山県の備前長船刀剣博物館で開催した「特別展 二次元 VS 日本刀展」(杉山昌男編 2014 『二次元 VS 日本刀~普及版~』(株式会社テレビせとうちクリエイト) などがある
- 7) 拙論 2003 「身体技術伝承の近代化—旧弘前藩領における近世流派剣術から近・現代剣道への変容について—」(青森県民俗の会『青森県の民俗 第3号』 p48~49)
- 8) 実例として八戸市の法霊神楽などがある。「地域文化芸術プラン推進事業」あおもり実行委員会・青森県民俗芸能等活性化推進委員会・青森県立郷土館編集・刊行 2000 『文化庁「地域文化芸術振興プラン推進事業」民俗芸能特別公演記録』
- 9) 例えば昭和 40 年代から 50 年代にかけて、青森県旧蟹田町の野鍛冶を含む、日本各地の農鍛冶の実態調査を行った農学博士佐藤次郎の研究には、生業や経済、交通交易等、民俗資料としても貴重なデータがたくさん含まれている(佐藤次郎 1979 『鋏と農鍛冶』クオリア)
- 10) 石塚尊俊 1972 『民俗民芸双書 70 鑪と鍛冶』岩崎美術社 p 213~222
- 11) 白田甚五郎監修・國學院大學説話研究会編 1975 『津軽百話』桜楓社、所収の昭和 38 年当時、弘前市種市在住の田中幸枝氏が語った「66、十腰内」の伝説。それによれば昔、十腰内に住む鍛冶屋へ、娘を嫁に欲しいという男が現れ、十日間で刀を十腰打てば許すとしたところ、実はその男の正体が「竜」であり、たちまち十腰の刀を打ってしまったので、鍛冶屋が一振りだけ隠して難を逃れたため、「十腰内」の地名の由来となったという伝説である。話型によっては、その男は竜ではなく、「鬼」または「鬼太夫」であったともいう。十腰内の伝承の詳細な分析に、畠山篤 2016 『岩木山の神と鬼』北方新社 (p121~138) がある。